

こんにちは。JICA シニア海外ボランティアの和田潤児といいます。神奈川県の特支援学校を2年間休職してタイ・チェンライ県の特支援教育センターでボランティア活動を行っています。タイの先生方へのアドバイスや保護者に対する教育相談が主な活動内容です。

今回はチェンライ県の障害児教育の現状と、特支援教育センターでの活動内容について紹介します。



県内には知的障害児のための特支援学校が1校あります。身辺自立していることが入学の条件で卒業後は社会参加できるような障害の軽い生徒が対象です。一般の小中学校で学ぶ障害児もいますが健常の子どもたちと一緒に勉強できる子どもたちに限られています。身体が不自由だったり、多動で落ち着きがなかったりすると学校は受け入れてくれません。

首都バンコクの発展を見ていると想像が付きませんが、教育の機会、質、内容すべてにおいて日本と大きな差があります。

チェンライ特支援教育センターは学校に行くことのできない障害児の支援のために設置され、福祉的サービスや教育的支援を行っています。

## 1) 通所する障害児の支援

センターに通所して個別指導を受けることができます。PT（理学療法士）

・OT（作業療法士）による機能的訓練、教師による個別学習が主な内容です。ただ送迎にかかる費用（ガソリン代など）が自己負担であること、両親は農作業で忙しく高齢の祖父母が送迎を担う家庭が多いことなどから、経済的、時間的に余裕のある家庭の子どもしか通所できないのが現状です。また訓練や学習の内容も障害の状態にあったものとは言えないことが多いようです。子どもの実態に応じた課題を適切な環境で行うように助言しながらセンターの先生たちと指導に当たっています。



## 2) 在宅障害児の巡回訪問

週に1度、センターの教師やPT（理学療法士）・OT（作業療法士）が訪問指導を行います。アカ族やモン族、リス族など少数民族が多く住む山岳地帯を巡回するため訪問先までとても時間がかかり、そのために1家庭当たりの時間は30分～1時間弱しかとることができません。また日本の訪問教育のように計画的に用意された学習指導は少なく、家族の方と話したりおむつや牛乳などの物品を支給したりするなど「慰問」の域を出ないように思います。専門的な知識を持つ教師が少ないこと、経済的に貧しい家庭が多く教育への関心が低いことなど様々な要因が背景にあるようです。子どもが生き生きと活動できるような時間を作ろうと様々なはたらきかけを試みているところです。

3) CBR (Community Based Rehabilitation) 地域の保健所や病院など関係機関と協力して在宅障害児のリハビリテーションを行う活動です。月に一度、郡の集会所や病院、お寺などに保健師、看護師、理学療法士などの専門家と障害児家庭が集まり機能訓練やレクリエーションを行います。施設や学校に通うことができない子どもたちやその家族に、福祉的、教育的な支援を行うことが目的で、家にこもりがちな在宅の障害児には貴重な活動の機会になっています。従来は保護者対象の研修や職業訓練が主体だったので、子どもたちが楽しめるような内容を盛り込むように提案し実施してきました。子どもたちと歌ったり踊ったり、ムーブメント的な活動を取り入れたりお菓子を作ったり、子ども自身が体験することで感覚が刺激されるような活動をたくさん行うようにしていきたいと思っています。



地域格差の激しいタイでは、経済発展から取り残され生活するだけでせいっぱいの人たちが多く暮らしています。ミャンマーやラオス国境の山岳地帯には国籍すらない少数民族の方たちも多く、貧困、麻薬、人身売買など多くの問題があります。劣悪な家庭環境と栄養状態や衛生面での課題を目の当たりにして、教師として派遣されている自分の無力さを痛感することも多くありました。日々の暮らしに追われる中で親が子どもの教育に目を向けることは難しく、安定した生活という基盤があってこそ子どもの教育が成り立つのだな、ということを実感する毎日です。



横浜ではじめて勤務した特別支援学校（当時は養護学校）は障害の状態がとても重い子どもたちが通う学校でした。細やかな配慮が必要な、ときに生命の危機と向き合う子どもたちに、少しでも楽しく健やかな時間を過ごしてもらおうと取り組んだ日々のことが思い出されます。どんな環境にあっても今向き合っている子どもの笑顔を引き出すこと、それが自分たちの仕事なんだということをタイの先生たちに伝えること。タイの山々を駆け巡りながらそんなことを考えています。

